

## Contents

- ブナ林の育成とスノーピーチプロジェクト
- 理事 紙谷智彦
- ブナ林を育むキノコ
- 助成先紹介  
生物多様性保全ネットワーク新潟
- 酒林づくり体験
- 第22回自然保護助成基金

魚沼市太白川集落のブナ林

## ブナ林の育成とスノーピーチプロジェクト

理事 紙谷智彦

豪雪地にはかつて薪炭林として利用されていた広葉樹林が多く残っています。集落周辺や奥山の緩傾斜地には拡大造林期のスギ人工林も見られますが、道路から離れると人工林は少なく、次第にブナが優占する二次林が目立ってきます。

かつて集落から遠く離れた奥山で玉切られた丸太は雪上をソリで、また、河川を流送し、薪材などとして販売されてきました。小径木は山中に小屋掛けした窯で製炭し、軽くなつた炭は俵で担ぎ下ろすことが出来たので、集落の貴重な現金収入にもなっていました。

このように、豪雪山間地集落の薪炭ブナ林は生業の森として持続的に活用され、集落経済の重要な資源として機能していました。半世紀前に家庭用エネルギーが化石燃料に切り替わったことにより、このような集落のブナ林は、その後利用されなく

なりました。

ブナが利用されなくなったもう一つの理由として、ブナ保護運動があります。かつて日本自然保護協会を中心として国内各地の市民団体による原生林の伐採反対運動が起き、その結果として国内の貴重なブナ原生林が保護されるようになりました。

一方で、保護運動が盛んに行われた地域では、生業のブナ林で暮らしを支えてきた集落の人々でさえ、ブナは切つてはいけない木という意識が定着したケースが少なくありませんでした。薪炭利用が激減していた時期とも重なり、生業のブナ林への関心は次第に薄れていったのです。

日本列島のブナ林分布が最深積雪の分布に極めて類似することからも明らかのように、ブナは豪雪に適応した樹種です。堅い材をもつブナは幹曲がりが多く、間伐によって植栽スギ以上に良好な肥大成長を示す

場合もあることから、豪雪地の林業樹種としての特性に優れているといえます。生業の森であったブナ林を持続的に活用することに、環境倫理的な罪悪感を持つ必要があるでしょうか。とは言え、このような二次林は、日本では管理経験の乏しい新たなタイプの林です。衰退する山間地集落で、かつての薪炭ブナ林を経済的な支えにするためには課題が山積です。

国内で家具や住宅内装などに広く使われているブナ材の多くは、欧州から輸入される「ホワイトビーチ」と呼ばれるブナの製材品に依存しています。欧州では、かつての薪炭ブナ林や造林されたブナを育成して活用しています。成長してきた国内のブナは欧州ブナに変わる可能性を有しているものの、家具などにはほとんど活用されてこなかったのです。

そこで最優先の課題となるのは、薪炭林で成長してきたブナ材の活用が可能かを試すことでした。衰退する集落には時間的な余裕はありません。ブナ材活用の道が開けない限り、

集落にブナ林業を奨めることなど絵空事に等しいからです。ブナ材の活用のためには、最初に国産ブナ材を使った製品化に目を向けてくれる業者が必要です。そのために2014年に新潟の家具製造店、工務店、木工作家など小規模の製造業者を訪ね、衰退する豪雪地集落を国産ブナ材の活用で支えてくれるよう、学生とともに、協力を要請してまわりました。これがスノービーチプロジェクトの始まりになりました。

スノービーチ材育成の原則は、2〜3回の間伐で成長が促された林床の前生稚樹を小面積のギャップ伐採によって天然更新させることとしています。間伐とギャップ伐採が繰り返されたその先には、生物多様性を育む原生林のような構造を備えた林が成立し、そこからさらに次世代のブナが収穫できる持続的な林業の姿があります。

(スノービーチプロジェクト世話人)



左：間伐時の条件が良いとブナ稚樹が更新。右：ギャップ伐採跡地には多様な植物が生育（いずれも大白川集落のブナ林）

## ブナ林を育むキノコ

ブナはさまざまな種類のキノコと共生しています。そのため、ブナ林はキノコの種類が豊富です。

キノコは生活の仕方で、ブナなどの樹木の根に外生菌根（がいせいきんこん）という組織を作り、樹木から栄養をもらって生活する「菌根菌（きんこんきん）」と、枯れ木などを分解して栄養を得る「木材腐朽菌」に大きく分けられます。菌根菌は、光合成で作られたブドウ糖などの栄養を樹木からもらいますが、菌根ができた樹木は、土壌中の養分や水分の吸収が良くなります。

「菌根菌」は木と助け合いながら生きる「木のお友だち」です。対して、「木材腐朽菌」は、森の枯れ木や落ち葉を土に還す「森のお掃除屋さん」といえるでしょう。

今年の夏、山のブナ林で見つけた「木のお友だち」をご紹介します。

(事務局)



かわいらしいけど毒キノコ、ヒメベニテングタケ（幼菌）



ヒメベニテングタケ（成長した姿）



チチタケ（栃木ではチチタケを具にを使った「ちたけうどん」が有名です）



裏がスポンジ状のアカヤマドリ（食）



カラフルで食感の良いタマゴタケ



手のひら位の大きさだったイグチの仲間

## 助成先紹介

### 生物多様性保全ネットワーク 新潟の活動紹介

事務局 井上信夫

本会は、2004年10月に、「地域に在来・固有の野生生物、希少種の保護、侵略的外来種などの抑制に向けた活動を行う」ことを目的に設立された。他の環境団体などとの連携によって、自然観察会や外来種駆除活動、環境学習やシンポジウムなどを開催し、各地の小中学校からの要請を受けて総合学習への支援も行っている。なお、2020年から蔓延し始めた新型コロナウイルス感染症に対しては、感染リスク対策を講じながら活動を継続している。主な活動の概要を紹介したい。

#### ●川の生きもの調査、自然体験活動

次世代を担う少年を対象に「夏休み親子魚探検隊」などの野外観察会を開催してきた。魚探検隊は年2回、近年は7月末に新発田市月岡、本地区の荒川川（ねっとわーく福島潟との共催）で、8月上旬に五泉市善願橋付近の早出川（五泉トゲソの会との共催）で開催している。タモ網やカジカ網などを使った生きもの採集のほか、ライフジャケットを着用した「川流れ」やボートによる川遊びなども行ってきた。参加者のほと

んどが小学生以下の子どものファミリーであるが、高校卒業後も参加される常連さんもある。



新発田市月岡での親子魚探検隊風景

#### ●外来種生息状況調査、駆除活動

これまでに新発田市内や南魚沼市、十日町市、上越市など県内各地で特定外来生物のブラックバス類やブルーギルなどの駆除活動を行ってきた。佐渡市では島内五十数ヶ所でオオクチバスの定着を確認し、管理者の協力を得ながら干し上げ駆除活動を進めてきた。2011年〜2019年の間に24ヶ所のため池で、膨大な数のオオクチバス、ブルーギルを駆除してきた。その結果、佐渡島固有種のサドガエルが復活した池がある一方、再び放流されてしまった池もある。この活動を通じて「佐渡在来生物を守る会」が誕生して活動を担い、

ドンデン山のフランスシグクの抜き取り作業も行われてきたが、活動の継続が課題である。

阿賀野川水系を中心に、福島県側から広がったと思われる北米原産の特定外来生物のウチダザリガニや北海道原産のフクドジョウなどの生息状況調査も行っている。



佐渡市住吉大池の外来魚駆除活動

#### ●希少種保護活動

多くの在来生物が生息環境の悪化や外来種の参入、乱獲などによって希少化してきているが、中山間地では十分な環境アセスメントが行われないまま工事が進められることが少なくない。ニホンイシガメやヤリタナゴなどの希少種が住む柏崎市西山地区の小河川でも河川改修計画が進んでいるため、地元や河川管理者と協議を進めて河床や法面のデザイン



柏崎市二田小学校の川の生きもの調査

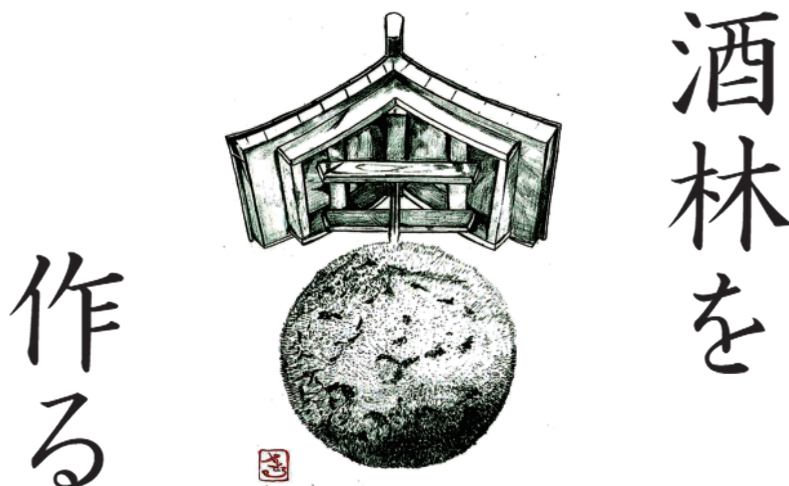
の見直しを行っている。また、これを機に「別山の自然を豊かにする会」が発足し、地元の小学校の総合学習支援や、近年ほとんど見られなくなったノカンゾウ野生個体群の保護活動も始めている。

以上、活動の概要を紹介したが、構成メンバーの高齢化が進むにつれてパワーダウンしているのが実情である。有望な学生が育ちながら新潟に残らないのが悩みであるが、次世代への種を撒き続けるのが使命と考えている。

これらの諸活動は、貴こしじ水と緑の会をはじめ、山口育英奨学会、新潟県勤労者福祉厚生財団やSAVING JAPANプロジェクト、地球環境基金など、多くの団体からの助成をいただいで進めてきた。心から感謝を申し上げる。

## 当財団ならではのプログラム「酒林づくり体験」参加者募集！

酒蔵では、新酒が出来ると軒先に新しいスギ葉で作った「酒林（さかばやし）」をつるします。また、酒樽をはじめとした容器や酒造りの道具にスギ材を用い、里山の恵を活かして生業を立ててきました。このプログラムでは、「酒林」をつくる体験を通して、酒文化と人と里山の関わりを考えます。



**開催日時** 10月22日（土）9：00～15：00

■**集合場所** 朝日酒造（株）製品倉庫付近（8：45受付開始）

■**開催場所** 朝日酒造（株）製品倉庫前

■**参加費** 一人500円（プログラム参加費、保険料を含む）  
当日、受付で承ります。  
（こしじ水と緑の会会員は300円）

■**募集** 大人10名（先着順）  
※定員になり次第締切らせていただきます。あらかじめご了承ください。

■**お申込** 10月12日（水）までにメール、FAXまたは電話で事務局へお申込みください。  
後日詳しいご案内をお送りいたします。

■**持ち物など** 長袖・長ズボン・軍手・防寒着・雨具・昼食・飲み物など

■**活動プログラム（予定）**

9：00	集合・あいさつ	13：00	酒林づくり
9：30	酒林づくり開始	14：30	まとめ
12：00	昼食	15：00	解散

■**連絡先**

メール : info@koshiji-nf.org

TEL・FAX : 0258-92-5238

■**お願い**

- ・参加にあたっては、新型コロナウイルス感染症対策のために手指の消毒、マスクの着用にご協力ください。
- ・当日37.5℃以上の発熱や体調不良がある場合、感染者との濃厚接触の可能性がある場合、また家族の中にこれらにあてはまる方がいらっしゃる場合は参加をご遠慮ください。

## 第22回こしじ水と緑の会・朝日酒造 自然保護助成基金 助成先募集

新潟県内の自然環境保全の実践活動や普及啓発活動に対し資金助成をいたします。

こしじ水と緑の会は、朝日酒造（株）の支援を受けて、民間団体・個人が行う新潟県内の自然環境の保全に関わる活動に対して資金助成を行います。多くの皆様のご応募をお待ちしております。

### ○募集期間

2022年11月1日（火）から2023年1月20日（金）（当日消印有効）

○助成金額：原則として1件あたり最高50万円、10件に対して助成

○活動内容：新潟県内の自然保護活動で、2023年4月以降に開始され2024年9月までに完了する次のような活動が助成の対象となります。活動の対象となる地理的範囲は、原則として新潟県内ですが、県境に位置する山塊での動植物の保全活動や、信濃川・阿賀野川など他県からの流入河川を調査する場合は、この限りではありません。

- (1)自然環境保全に関する実践活動
- (2)自然環境保全に関する普及啓発活動
- (3)自然環境保全に関する環境教育活動
- (4)自然環境保全に関する成果の公表・出版
- (5)自然環境保全に関する調査研究

地域住民が主体となって、実際に現場で行うような活動を審査では重視します。

※過去の助成対象活動は、当財団のホームページ（<https://www.koshiji-nf.org>）内の「助成事業」でご覧になれます。

### ○お申込み

募集要項および申請書を当財団ホームページ「助成事業」にてダウンロードし、必要事項をご記入のうえ募集期間内に事務局に郵送してください。

### 編集後記

自然保護助成基金の助成先の募集が11月から始まります。今年は、1件あたり最大50万円に助成金額を増額します。今まで以上に活動の幅が広がると思いますので、多くの皆さまの応募をお待ちしております。お知り合いでご興味のある方がいらっしゃれば、ぜひお知らせください。（拓）

### 会員動向（2022年8月31日現在）

会員449名（個人388、法人61）

引き続き、ご支援のほど宜しくお願い致します。

公益財団法人

こしじ水と緑の会



本誌は再生紙を使用しています  
植物油インキを使用しています

〒949-5412 新潟県長岡市朝日595番地5 電話・FAX 0258-92-5238  
HP <https://www.koshiji-nf.org> E-mail [info@koshiji-nf.org](mailto:info@koshiji-nf.org)